

オーストラリア学会報

Australian Studies Association of Japan

第35号

URL <http://pweb.sophia.ac.jp/~s-yuga/asaj2/>

2002年4月22日

1. 2002年度総会・全国研究大会のご案内

オーストラリア学会 2002年度総会・全国研究大会は6月8日(土)と9日(日)の両日、日本大学湘南校舎(小田急江ノ島線六会日大前下車)で開催されますので、ご参集ください。

2002年4月22日

オーストラリア学会代表理事 谷内 達
同 大会実行委員長 小林 信一

2. 第13回大会/2002年度総会・全国研究大会プログラム

□ 6月8日(土) 午前12時～午後5時まで オーストラリア紹介パネル展示(学会関連行事)

10:30～ 受付開始

11:00～11:05 開会挨拶

11:05～12:35

特別講演「オーストラリアの自然と農業—WTO体制下の日豪関係」

Paul Riethmuller キーンズランド大学経済学部助教授(通訳付き)

14:00～17:10 学会個別報告(報告30分、質問5分)

個別報告Ⅰ

【座長 関根政美(慶応大学)】

14:00～14:35

「シドニーオリンピックにおける多文化主義」 川上代里子(成蹊大学大学院)

14:35～15:10

「クィンズランド州レザーブ政策の歴史的考察」 坂口 清(神戸大学大学院)

15:10～15:45

「フリンジ・キャンプと“クラス”—地方町モリーにおけるガミラロイの歴史と現在」

松山利夫(国立民族学博物館)

15:45～16:00 休憩

個別報告Ⅱ

【座長 鎌田真弓(名古屋商科大学)】

16:00～16:35

「オーストラリアのSPF関与の志向性—南太平洋における地域協力と冷戦認識」

山本菜々(東京大学大学院)

16:35～17:10

「保育をめぐる議論」

臼田明子(NSW大学大学院)

17:30～ 懇親会

□ 6月9日(日)

10:00～15:00 テーマセッション(報告35分、質問5分)

「ジャパニーズ・イン・オーストラリア—記憶<過去と現在の交錯点>」

- 10:00～10:05 司会挨拶 村上雄一（福島大学）
- 10:05～10:45 「不可解なるエスニシティー日系オーストラリア人強制収容が意味したこと―」
永田由利子（クイーンズランド大学）
- 10:45～11:25 「Point of No Return ―「日本人妻」から「オーストラリア人」への脱皮―」
田村恵子（オーストラリア国立大学・オーストラリア国立戦争記念館）
- 11:25～12:05 「オーストラリア先住民とジャパニーズ―開かれた『和解』のために―」
保苺 実（日本学術振興会特別研究員）
- 12:05～13:30 昼食（理事会）
- 13:30～14:10 「エッセンシャルな『記憶』／ハイブリッドな『記憶』―キャンベラの日本人
エスニック・スクールを事例に―」 塩原良和（慶応義塾大学大学院）
- 14:10～15:00 コメントおよび全体討論
- 15:00～15:30 総会

報告要旨

シドニーオリンピックにおける多文化主義

川上代里子（成蹊大学大学院在）

2000年9月に開催されたシドニーオリンピックの一つの特徴として、大会主催者が、オーストラリアが標榜する多文化主義と、オリンピック精神におけるインターナショナリズムに類似性を見出し、オリンピックの開催を通じて多文化主義を促進しようとしたことが挙げられる。開会式においては多文化社会オーストラリアをいかに描くかがテーマとされ、先住民や全国のコミュニティは、開会式をはじめとするセレモニーやイベントへの参加などの形でオリンピックに関わることを呼びかけられた。本報告では、開会式などのセレモニーやイベントにおいて、主催者が、多文化主義をどのように捉え表現したのかを、その背後の意図も含めて明らかにしていきたい。

クインズランド州リザーブ政策の歴史的考察

坂口 清（神戸大学大学院在）

歴史からのアボリジニの不可視化は、まずフロンティアでの暴力による絶滅政策に始まり、ついで保護と言う名の隔離政策が続き、各地に保留地が設置された。この隔離政策によりアボリジニたちはリザーブに閉じ込められ、法的、行政的手段で束縛されて白人中心社会から不可視化された。アボリジニの人々は各種の法規や、リザーブによって伝統的社会や家庭を破壊されたのであったが、同時に、彼等はリザーブと言う閉鎖的空間でアボリジニとしてのアイデンティティを育んできたのも事実である。このリザーブ政策を歴史的に振り返ることにより、現在オーストラリアに存在するアボリジニと非アボリジニの「共通の物語」というものを考えてみたい。

フリンジ・キャンプと”クラス” ―地方町モリーにおけるガミラロイの歴史と現在―

松山利夫（国立民族学博物館）

NSW北西平原、ガミラロイ領域への植民は1835年頃に本格化する。モリー（Moree）は1862年に彼らの領域の中心に建設され、1895年の温泉掘削と1900年代からの小麦生産を背景に、農業と観光の中心地として展開してきた。人口は15,517人、アボリジナルのセンサス人口は2,625人であるが（1996）、その実数は4,000人弱と推定される。この報告ではモリーにおけるフリンジ・キャンプの形成と排除、およびガミラロイ内部での”クラス”の出現とその変容を考察する。そ

れらはいわゆる辺境とも、メトロポリタンのアボリジナル社会とも異なった様相を示すのである。

オーストラリアの SPF 関与の志向性—南太平洋における地域協力と冷戦認識

山元菜々（東京大学大学院在）

本報告では、南太平洋島嶼国の発案で成立した「南太平洋フォーラム(SPF)」に対して、地域大国であるオーストラリアがどの様に関与してきたかを明らかにし、オーストラリアの南太平洋政策における地域協力の意味を考察する。

オーストラリアの SPF 関与の志向性は、「SPC の補完枠組(1971-74)」、「島嶼国の信頼回復のための枠組(75-76)」、「ANZUS の利便のための枠組(76-77)」、「西側のパートナー育成のための枠組(78-82)」という変化をたどった。このことは、1970 年代以降のオーストラリアが、島嶼国の自立志向への配慮、及び南太平洋への冷戦波及認識という二つの軸の中で SPF に様々な意味を付与し、その活用を試みたことを示すものである。

保育をめぐる議論

臼田 明子（ニューサウスウェールズ大学大学院在）

女性の社会進出によって、また、福祉大国としても知られるオーストラリアでは保育環境に恵まれているような印象を受ける。今まで日本に紹介されたオーストラリアの保育についての文献は、制度の紹介を主としたものであった。しかし、実際には保育をめぐる、フェミニストたちや精神科医で議論がある一方、母親達は、また別のジレンマや不安を抱えている。これに伴って「良い母親」の定義に関しても意見は多様化し混迷している。本発表では、これらを紹介し「良い保育」とは何かを様々な視点から考察してゆきたい。

テーマセッション ジャパニーズ・イン・オーストラリア —記憶<過去と現在の交錯点>—

不可解なるエスニシティ —日系オーストラリア人強制収容が意味したこと—

永田由利子（クイーンズランド大学）

日本の第二次世界大戦介入により、オーストラリアは英連邦の自治領として英国に従いオーストラリア国内の日本人・日系人を敵性外国人として強制収容した。当時の日本人・日系人の数は少なく、またコミュニティーも地域毎にまとまっていた。強制収容は迅速に、かつ徹底して行なわれ、抑留者はオーストラリア大陸の内陸部の三ヶ所に建設された収容所で抑留生活を強いられた。戦後のオーストラリアに残留できたのは、ほんの一握りの日系人だけで、オーストラリアにあった戦前の日系人社会は、本国強制送還によりほとんど消滅してしまう。報告はまず、オーストラリアにおける強制収容の全容を概観し、それが戦後の日系オーストラリア人にもたらした影響をオーストラリア社会に視座を置きつつ考察する。

Point of No Return —日本人妻がオーストラリア人になるとき—

田村恵子（オーストラリア国立大学・オーストラリア国立戦争記念館）

終戦後占領軍として進駐した連合軍兵士と結婚し夫の国へ移住女性たちは、一般的に「戦争花嫁」と呼ばれている。オーストラリア軍は、英連邦軍の一員として 1946 年から朝鮮戦争終了後の 1956 年までの約 10 年間にかけて、広島県呉市を中心に駐留した。駐留が始まった後かなりの期間、オーストラリア軍は反宥和政策を実施し、駐留軍兵士と日本人の一般市民との個人対個人の交流は厳しく制限した。

しかしそのような状況下でも、オーストラリア兵士と日本人女性が出会い恋愛をした。1952 年によりやくオーストラリア政府が日本人女性の入国を許可し、正式な結婚が認められ

るようになって、オーストラリア軍が日本から完全撤退するまでの1956年までに、約650人の日本人女性が戦争花嫁としてオーストラリアに渡ったといわれている。私はオーストラリア在住の戦争花嫁を対象に生活史の聞き取り調査を行いデータを収集した。今回の発表ではこのデータを中心に、日本人戦争花嫁たちがオーストラリアへの定着の段階をどのように語るかに関して考察したい。

調査で明らかになったのは、戦争花嫁たちのにとっての恒久的生活の場の認識が日本からしだいにオーストラリアへ移行する過程で、いわゆる「point of no return」とでもいえる節目があることである。つまりこの点を越えた時に、彼女たちは、「もはや日本に戻ることはない。オーストラリアで生きていくのだ」と自覚したのだった。このようなオーストラリア定着への決定的な契機が、どのようにしてもたらされたのかを、戦争花嫁たちの語りと、当時彼女たちが体験した、オーストラリアの社会や文化の分析をとおして考えたい。

オーストラリア先住民とジャパニーズ —開かれた「和解」のために—

保莉実(日本学術振興会特別研究員)

アボリジニ和解評議会は、多様な出自をもつ「われわれオーストラリア人」が「歴史の真実」を共有することの重要性を訴える。ところが、和解評議会が出版した『歴史を共有する』での歴史記述は、ヨーロッパ系移民によるアボリジニの土地と文化の略奪に終始しており、アジア系移民の歴史経験についての言及はない。「和解」の責任主体とされる「われわれオーストラリア人」とは誰なのか？コロニアリズムの加害者でありながら、同時にレイシズムの犠牲者でもあるアジア系オーストラリア移民は、先住民との「和解」において、いかなる〈集合的記憶〉を引き受けるのか？この問題をオーストラリアの日系移民史を手がかりに検討していく。

エッセンシャルな「記憶」／ハイブリッドな「記憶」—キャンベラの日本人エスニック・スクールを事例に—

塩原良和(慶応義塾大学大学院)

多文化主義がエスニック文化を本質化することを問題視する様々な立場からの批判が台頭している。そこで本報告では、キャンベラにある日本人定住者の子供のためのエスニックスクール『CJC 日本語教室』での約1年間の参与観察、インタビューをもとに、エスニック・コミュニティによる自文化の本質化の実践から主流文化との力関係のなかでハイブリッド性が生み出されていく過程を、教室関係者の日本文化にまつわる「記憶」の構築と変容を鍵として分析する。それにより「ハイブリッド性を促す本質主義」の可能性を提起し、本質主義批判を乗り越えつつエスニック・コミュニティの地位向上の原理としての多文化主義を再興するための試論とする。

『オーストラリア研究』第15号投稿募集

『オーストラリア研究』第15号(2002年12月発行予定)に掲載する論文を募集します。締め切りは7月末日。詳細は最近号掲載の「投稿要領」をご覧ください。 編集委員会

投稿・連絡先 〒252-8510 藤沢市亀井野 1866 日本大学生物資源科学部 小林 信一

Tel: 0466-84-3656 Fax: 0466-80-1178 E-mail: kobayashi@brs.nihon-u.ac.jp

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 東京大学教養学部人文地理学教室気付

オーストラリア学会事務局 Tel: 03-5454-6252/FAX: 03-3465-9184

会費振込先: 00190-3-157063 加入口座名: オーストラリア学会

※本会報は学会記録以外に、会員のご意見やご要望を掲載します。意見、著書、新刊、訳書、投稿など、事務局または会報担当理事(鈴木、HAF00025@nifty.ne.jp)までお送りください。